DEBUT 首長

千葉県印西市長　板倉　正直氏

200億のゴミ焼却場移転中止 URだのみのまちづくり脱却

いたくら・まさなお　1946年千葉県生まれ。地元の小・中学校、成田高校（成田市）を卒業し、農業。75年から印西町・市議を10期連続で務め、ニュータウン対策特別委員会、建設常任委員会、議会運営委員会などの委員長を歴任した。父親は板倉直保・元町長。７月８日の選挙で初当選した。66歳。

印西市（いんざいし）　北に利根川が流れる千葉県北部の市。1980年代からUR都市機構などによる「千葉ニュータウン」開発が本格化し人口が急増。現在８万8000人。

――７月の選挙で現職を破り初当選した。市政運営の基本方針は。

まずは「市民目線」の重視だ。市長選で争点になったゴミ焼却場移転問題でも、事前に十分な説明がなされなかったことに対する市民の不満が強かった。これからは丁寧に市民に向き合い、説明すること。そして、市民に説明できる内容の政策をつくること。これを市制の基本方針にする。市民目線の基本方針が浸透すれば、市役所の接客や勤務状況も変わっていくはずだ。市民はお客様という意識を徹底する。今までと同じことをやっていたのでは市民から評価されない。地方政治はスピード感が命だ。

――前市長が決めたゴミ焼却場移転計画の白紙撤回を公約に掲げた。

200億円近い予算を使い、40億円でUR都市機構の土地を買う計画は無駄遣いであり、計画から完全に撤退する。そもそも千葉ニュータウン中央駅に近い印西市の顔というべき場所に巨大なごみ処理施設を置く計画自体が常識で考えておかしい。今、あわてて移転しなくても、炉は少なくともあと10年は持つはずだ。

では、限界に近づいているゴミ処理をどうするのかという指摘はある。そのためにゴミの減量化を徹底し、ゴミ問題の先進自治体を目指していく。ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言をした徳島県上勝町などの先行事例を参考にしながら早急に減量化の計画をまとめ、ゴミ分別などで市民や町内会の皆さんに協力を求めたい。市役所の関係部署が縦割り行政の発想を捨て、最優先で取り組んでいく。

――医療など市民生活の課題は。

急病人を病院に運び込む救急搬送時間は、印西市の場合44分もかかり、全国平均の37分を上回っている。しかも９万都市なのに２次救急病院が市内に存在しない。いずれも市民の命に関わる問題であり、早急に改善したい。また、東京と印西市を結ぶ北総鉄道の値下げや買い物難民の解消についても、従来とは違った発想でアイデアを出していきたい。

――千葉ニュータウンの開発事業は2014年に終了する。今後のまちづくりをどう考える。

印西市のまちづくりは、従来の「URだのみ」から、市主導へと変わる過渡期にある。これはわれわれに取って大きなチャレンジであると同時に、「市民目線」のまちづくりへと転換するチャンスでもある。市長のリーダーシップと市職員の努力がかみ合えば、「住んでよかった」と言われる印西市をつくることが出来ると確信している。将来の世代にツケを回すことが無いよう、しっかり取り組んでいく。

（千葉支局長　**田辺　省二**）

禁複製・無断転載